

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

体操競技の現状と問題性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 芳明, MATSUMOTO, Yoshiaki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2012

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



体操競技の現状と問題性

松本 芳明

1. はじめに ― 問題の所在

二〇世紀になってすでに一五年が経過しようとしている。強く進められ、「グローバルスタンダード」という画一化された基準のもとに世界がひとつの共通の「場」になる状況がつけられた。そうしたグローバル化の進展は、二〇世紀末からは「経済」的な段階へと歩みを進め、二一世紀に入ってから経済を中心とした「価値観の均一化」がより強く押し進められて今日に至っている。この経済を中心としたグローバル社会においては、すべてが経済原理と科学技術を最優先にした考えの下に均一化されて、あらゆるものが「モノ化」され「商品化」されてきているといえよう。それは、人々が生活に用いる物品のみならず、「コモモンズ（共有財産）」と呼ばれるすべての民族や地域共同体にとって共有のものとされるべき水や空気、森林、種子、さらには長年かけて築きあげてきた人類の知恵や知識等といったものも、経済原理のもとに商品化がなされるまでに至っている^①。

スポーツも、こうしたグローバル化の影響を受けた進展のプロセスをたどってきている。今日行われている多くの競技スポーツは、近代になって各々の地域の生活に密接に結びついた土着性・土俗性などのさまざまな特徴の多くを削ぎ落と

して、中性化して形づくられた近代競技スポーツがその基になっている。それが、グローバル化の流れに乗って世界に広げられる過程で、文化的によりニュートラルに無色透明化されることにより、地球上のすべての人々が共有することのできるグローバルスポーツへと進展してきたのである。そうしたグローバルスポーツへの進展は、多くのスポーツが持っていた個々の特性をできるだけ少なくして数値化できるように改変することを促していき、数値化できる結果が最終的に大きな価値をもつようなもの（結果の数量化）へとスポーツが変えられていくこととなったのである。

また、あらゆるものが「商品化」される現在の経済を中心としたグローバル社会においては、スポーツもまたその状況の中に組み込まれている。ここでは、スポーツそのものも、競技に使用される施設や用具も、さらにはそこでプレイするアスリートも含めたスポーツに関わるすべてのものが「商品」としてより価値の高いものへと開発されるようになってきているのである。競技の形式やルールの内容についても、スポーツ競技に直接関わるスポーツ界内部の要請からよりも、メディアやスポンサー等の経済的な根拠から発せられる外圧によって変えざるをえないような状況が数多く生じてきている。つまり、競技形式やルールの変更がプレイヤー側

の理由からではなく、より「商品価値」の高いものにするという経済的論理の下になされるようになっているのである。その結果、オリンピックに代表されるグローバルなスポーツイベントにおいて実施されるスポーツ競技は、最高の競技環境の中で究極レベルまで鍛え上げられたアスリートが最高のパフォーマンスを競い合うエンターテインメントの場となっており、メディアを通じて膨大な数の観衆を魅了する非常に商品価値の高いものになってきている。そうしたスポーツ競技の現状を「発展」として肯定的に捉えるのか、あるいはスポーツ自体やアスリートを「モノ化」「商品化」してその価値の上昇を追い求め続けていくことの先に否定的な展望を、つまり一種の「破局」を予感するのか、スポーツの現状についてそこに内在する問題性を含めて批評していくことがスポーツの将来を考える上でも重要になると考えられる。

本小論ではそうした問題意識のもとで、最高レベルのパフォーマンスを展開しているグローバルスポーツの代表的な種目のひとつである体操競技を考察の対象として取り上げ、現在のようなグローバルスポーツとなるまでのプロセスを明らかにするとともに、現在の特徴とそこでの問題性について検討していくことにする。

2. 近代競技スポーツとしての形成からグローバル化への進展

2-1. 近代競技スポーツとしての形成

体操競技は、一般的には一八一一年にF・L・ヤーンが創始したドイツ体操にその源流が求められる。ヤーンは、その

創始した体操に「トゥルネン (Turnen)」というドイツ語由来の名称をつけ、あん馬や跳馬といった古くからドイツにあった器械と鉄棒や平行棒といった新たに工夫した器械など多くの器械を用いて内容を構成した。そこで行われた運動は、古くからドイツにおいて行われていた伝統的な運動から新たに工夫されて創り出された運動まで、実に豊富な内容のものであった⁽²⁾。したがって、こうした名称からその体操の内容まで含め、ヤーンの体操はドイツ的な文化性を色濃く持ったものであったといえよう。

このトゥルネンが一九世紀半ばからドイツ国内において競技化され、後にオリンピックの進展と歩みをともしして国際化され、近代競技スポーツとしての「体操競技」となっていたのである。しかし、体操競技の本質的な特徴と言われている「難しさ (非日常的驚異性)」と「美しさ (姿勢的簡潔性)」は、すでにヤーンのトゥルネンの中にその萌芽がみられ、このような本質的な特徴は近代競技スポーツとして国際的に発展していく中でもずっと保ち続けられていた⁽³⁾。

近代オリンピックは、その第一回大会が一八九六年にギリシアのアテネで開催され二〇二二年のロンドン大会で第三〇回を迎えたが、体操競技はその第一回目から正式種目として歩みを共にしてきた。第二次世界大戦終了までの二〇世紀前半においては、オリンピックそのものも国際的な競技会として形を整えていく段階であったように、体操競技も大会毎にさまざまな試行錯誤を行い、その競技スポーツとしての形式を模索していく時期であった。そうした状況は戦後をはじめ行われた一九四八年のロンドンオリンピックでも変わら

ず、自国のルールに基づいて判定する審判間の採点結果に大きな差が続出するなど、大きな問題となった。このため、翌年の一九四九年に国際体操連盟によって初めての国際的な統一ルールが制定され、器械種目のみの採点競技という形を整え、ようやく近代競技スポーツとしての体操競技の骨格が整えられたのである⁽⁴⁾。

2-1-2. 政治的なグローバル化の中でのパフォーマンスの高度化の進展

第二次世界大戦後の二〇世紀後半は、世界のあらゆる分野の活動において政治的なステージでのグローバル化が強く進められた時期であった。スポーツの領域においても、一九五二年のヘルシンキオリンピックから旧ソ連が参加するようになり、「冷戦体制」の下でのオリンピック」という新たなステージに突入することになる。直接的な全面戦争が不可能な状態の「冷戦体制」の下で開催されたオリンピックは、政治を中心としたグローバル化の中で、「代理戦争」的な役割をもたされるようになり、そこにおいて実施される各種競技には国と国の力の争いという意味合いが強く持たされ、「勝つ」ことの価値が増大していくともなつて「勝利至上主義」の考え方がエスカレートしていくことになった。

体操競技の場合、そうした状況の中で一九六四年の東京オリンピックを契機に高難度の技を志向する方向で競技レベルの進展がなされていくことになる。表1に示したように、東京オリンピックに向けて改定された採点規則では、A、B、Cの各難度の具体的な技が体系的に整理され、難しい技の実

施におけるミスに対するマイナス評価を緩和する「減点緩和」のルールも設けられ、演技の高難度化をより高く評価する姿勢が打ち出された。こうした方向性は、それ以後の採点規則の改定においてもみられ、一九六八年の改定では「加点」のルールが新たに設けられ、国際大会で勝つためにはいかに難しい技を演技構成の中に入れるかが決定的な要因となつていったのである。こうした状況の中で、日本は一九六〇年のローマオリンピックから一九七六年のモントリオールオリンピックまでの間、オリンピックと世界選手権で一〇連覇するという偉業を成し遂げたが、それ以降の国際大会では全く勝てなくなつていった。その背景には、国家レベルで競技力強化を推し進めた共産圏の国々の台頭があつた。

旧ソ連や旧東ドイツを中心とした共産圏の国々においては、一九七〇年代になると「なんとしても勝て！」という要求を満たすために、国家レベルでの競技レベルアップの対策がより強化されて展開されるようになった。具体的には、スポーツ医・科学の最新の成果を利用したトレーニングの科学化や低年齢からのピラミッド形式の選手養成システムの構築、最新のテクノロジーを利用した体操器械の開発や着地における安全性を飛躍的に向上させた練習用着地施設（ピット）の導入といった方策が、国家レベルのサポートを受けて進められたのである。こうした国家レベルでの取り組みによって、一九七〇年代から八〇年代にかけて数多くの高難度の新しい技の開発が行われ、体操競技の高度化の流れが一気に加速していった⁽⁵⁾。

こうした一九七〇年代以降に顕著となる競技力アップの

対策は、ある意味で「人間の能力の限界を追求する」という願望を満たそうとするものであり、その意味では肯定されるものであるといえよう。しかし、そこには選手の「身体」を開発可能な素材（資材）として捉え、徹底的な科学的トレーニングによってその性能を開発していこうとする考え方が存在しており、選手を一種の機械（モノ）として捉えて、あたかも「サイボーグ（人造人間）」的なアスリート養成の様相を呈するという大きな問題を含んだ状況も生じている。確かに、最新の科学的成果を利用して人間のもつ潜在的な能力（可能性）を開発しその限界を追求するということは「是」とされるものであるが、そこに国家の政治的意図が関与すると、「勝つ」ための道具としてアスリートの身体を養成（製造）するという様相が顔を出すことになる。そうした道具としてのアスリートの身体の性能追求がエスカレートすると、そこには「人間」が消し去られた「機械（モノ）」としての身体という「狂気」の様相が顔を出すことになる。そうした流れが、サイボーグ的なアスリート養成の一手段として禁止薬物の使用（ドーピング）が盛んに行われる状況をつくり出すようになったのは必然とも言えよう⁶⁾。

3. 経済的なグローバル化の下での進展とそこに内在する問題性

3-1. 経済的なグローバル化への移行に伴うグローバルスポーツの変化

一九八〇年代にはいると、世界のグローバル化のステージは徐々に政治的な段階から経済的な段階に移行するように

なる。そうした「経済」を中心としたグローバル化の流れは、一九八〇年代末の東欧諸国の経済的崩壊へとつながり、「壁の崩壊」を契機に冷戦体制が終焉を迎え、一九九〇年代からは経済を中心としたグローバル化への流れを決定的なものとしていくことになる。その傾向は、二一世紀に入ってからますます強くなってきたおり、当初アメリカを唯一の超大国とするグローバル社会という構図から、現在では中国の台頭や「EU」という拡大した欧州経済圏の成立によって、より複雑な構造をもつ経済的グローバル化の時代を迎えるに至っている。こうした政治的な段階から経済的な段階へと移行した世界のグローバル化について西谷修氏は、「今日のグローバル化と人間社会における〈経済〉の前景化とは切り離すことができない」し、そして「すべてを商品化し流通させる「市場」という経済のエレメント」がグローバルなステージとして浮かび上がらされている、と捉えている⁷⁾。

こうした状況は、スポーツに関しても同様に見られる。オリンピックについてみると、一九八四年のロスアンゼルス大会で「民営化」されたのを機にグローバルビジネスの市場で流通しうる商品とみなされ、九〇年代以降その商品価値をますます高めていくことになる。そうした進展のベースとなったのが、テレビを中心としたメディアとの結びつきである。つまり、テレビを中心としたメディアによってリアルタイムでその競技の様相が世界中に配信されることにより、世界中の膨大な数の観衆が惹きつけられる状況が作り出され、オリンピックは商品価値の高いメディアスポーツイベントとして位置づけられるようになっていった。そうしたオリ

ンピックの経済的な価値の高まりは、そこに正式種目として採用されることがメジャーなグローバルスポーツとして認められるための重要な条件とみなされる状況を生じさせ、各スポーツ競技連盟がこぞって正式種目として採用されるために商品価値の高いスポーツとなる努力をするようになっていったのである。商品価値の高さを示すメルクマールとなるのは競技の普及度と人気度、つまり競技連盟への加盟国数、競技者数、ファンの数、そして高いテレビ視聴率といったものであるが、そうした普及度と人気度を高めるために、競技形式やルールの大きな変更、そして判定方法の客観化や精密化といったことが頻繁に行われるようになっていった。

そうした普及度と人気度を高めるための変更例の幾つかを以下にあげてみる。

○バレーボールとバドミントンのラリーポイント制や卓球の二ポイント制から一ポイント制への変更等のように、競技進行のスピードアップを意図した変更。

○柔道や体操競技におけるウェアのカラー化、卓球やバレーボール等のボールゲームにおける用具（ボール）のカラー化。

○柔道やレスリング等の格技系競技における形式化したルールの組み合わせによってより細かくポイント化・階級化したルールにおいて数値的な結果で評価される競技方式。

○陸上競技や水泳競技やスキー・スケート等のスピードを競う測定競技における「記録の更新」に価値をおいた用具・施設・測定機器に関するルールの変更。

○テニス・バドミントン・ベ이스ボール（チャレンジ）や柔

道・レスリング・フィギュアスケートなどのデジタルな「ビデオ映像」を基にした判定方法や、スピードスケート等の測定競技における一〇〇〇分の一秒まで測定可能な精密な機器による客観的で正確な判定方法の採用。

こうした変更の例をみてみると、それぞれに独特な特徴を持つていたスポーツ競技がグローバルスポーツとして進展する経過の中で、多くの点でその特徴を似通ったものへと、つまりよりスピーディーなものに、より華やかなもの、よりデジタルなものに、というように変えられていっているという印象を受ける。しかもこれらの変更は、その多くがスポーツをする人間側からではなく、「経済」という外側の論理から要請されてきたものと考えられる。グローバルスポーツは、テレビを中心としたメディアを通じて再創造されて膨大な数の視聴者に配信されるメディアスポーツという側面を持つている。それ故に、多くの観衆により分かりやすく、面白く、そして最新のテクノロジーによって加工された映像において観た場合でもより「客観的」で「正確」な判定となるように要請されてきている。そうしたメディアと深く関係した「経済」的な要請が、多くのグローバルスポーツを特徴の似通ったニュートラルなものへと変化させてきているといえよう。

3-2. グローバルスポーツとしての体操競技の変化

体操競技の場合、グローバルなメディアスポーツとして経済的な論理による要請に応じて観てより面白いものになるようにという意図で行われた変更には、「規定演技」の廃止、

「種目別競技」に対する価値の増大、団体競技の方式の変化という三つのものが考えられる。

規定演技の廃止について。一九九六年のアトランタオリンピックを最後に、国際大会が始まった最初から自由演技とともに競技の基本とされていた「規定演技」が廃止された。規定演技廃止という変更がなされた理由としては、次の二つことがあげられている。まず、参加選手すべてが同じ演技を行うのは面白くなくメディアや観客離れにつながるということ。二つめに、特に競技レベルの低い加盟国の選手にとって規定演技を行うのが難しくトレーニングの負担が大きすぎること⁸⁾。この二つには、前項でみた視聴率と加盟国数の問題も関連していると考えられる。

「種目別競技」に対する価値の増大について。体操競技の世界選手権大会は、一九〇三年にその第一回が開催されている。以後、一九八〇年代まで器械種目すべての結果を合わせた「総合競技」という競技方式を中心に開催されてきたが、一九九〇年代になると「種目別競技」だけの世界選手権大会も開催されるようにルールが変更された。そして、世界選手権大会の種目別金メダリストにもオリンピックへの参加資格が与えられるようになった。こうした種目別競技に対して従来よりも高い価値を置くようになったのは、各種目のスペシャリストの超人的な演技を観る楽しさを増やすという意図があったと考えられる⁹⁾。そこには、メディアの強い影響が関連しているといえる。

団体競技の方式の変化について。二〇〇四年のアテネオリンピックから、団体競技決勝の競技方式が変更となった。そ

れまでの「一チーム六人の選手のうち各種目上位五人の得点の合計」で競う方式から、「一チーム六人の選手のうち各種目ごとに三人の選手が出場し、その三人すべての得点の合計」で競う方式への変更であった。このことによって、エキスパートの要素がより強調されるようになり、勝つためには失敗が許されないという状況が作り出され、また競技において大逆転や番狂わせが起こる可能性が高まり、観ていてより面白いものにする変更であったと考えられる。

以上のように、経済的な要請と関連して一九九〇年代以降にメディアスポーツとして体操競技に大きな変化がもたらされていったのであるが、そうした変化の背景にあったのが留まることのない難しさ追求への進展方向であり、その成果として超人的なレベルにまで達した演技の高度化である。そうした高度化の進展は、スポーツ科学の最新の成果に基づいたトレーニングにおける選手個人の努力はもろろんであるが、高度な技の開発をバックアップする器械の性能改善や、高難度化の方向性を評価する度重なる採点規則の改定に支えられたものでもあった。

3-3. 高度化を支える器械の性能改善と採点規則の改定

体操競技における器械の性能改善は、その時々の科学技術の最新の成果に支えられて不断に進められてきた。すべての器械の性能改善が試みられてきた経過の中で、特にゆかと跳馬の高難度化を一気に進展させるような器械の変化が、一九八〇年代後半以降に行われている。

「ゆか」の器械は、一九八〇年代後半に弾性パネルとクツ

シヨン付カーペットを組み合わせて「二二〇ミリ±一〇ミリ」の厚さとなった高い弾性を持つものが登場した。こうした器械は、生身の人間のボディ・パワーをはるかに超えた大きなパワーを生み出し、これまでとは比べものにならないほどの雄大な空中局面をつくり出すことを可能にしていた。一九九〇年代になると、器械の厚さは「最大一三五ミリ」とさらに厚くなり、二一世紀に入るとコイルスプリングを内蔵してさらに弾性の高いものとなっていった⁽¹⁰⁾。こうした度重なるゆか器械の性能改善に支えられて、後方三回宙返り、後方伸身二回宙返り二回ひねり、後方伸身宙返り四回ひねり（シライ）といった超高難度の技が開発され、また複数の高度な宙返り技を連続して行う演技も可能となっていった。

「跳馬」の器械は、一九八〇年代後半に着手をする馬体部を弾力性のある二重構造に改良して、手の突き放し後の空中局面をより高く雄大にすることができるようになった。この時、二重構造のロイター式踏切板が厚みを「二〇〇ミリ±一〇ミリ」と従来よりも厚くし、コイルスプリングも内蔵して弾性をさらに増すように改良されたことも、雄大な空中局面を生み出すことに影響を与えている⁽¹¹⁾。さらに二一世紀に入った二〇〇一年には、従来の馬の形をデフォルメした基本の形態（縦一六〇センチ・横三五センチの長方形）を大幅に変えて「机型（縦一二〇センチ・横九五センチ）」にする変更が行われた⁽¹²⁾。このように着手部分が広くなったことにより、手を着く器械上部もより弾性を持つ構造になったことと合わせて、助走―ロンダードからの踏切による技を始めとした高難度の技が数多く開発されるようになっていった。

こうしたゆかや跳馬の器械の性能改善は、体操競技が戦後すぐに近代競技スポーツとして形を整えた頃の生身の人間のボディ・パワーがつくり出した演技内容と比較して、まさに器械の力に支えられて生み出される異次元のパワーによって超人的に高度な演技内容へと高められていくのに大きな貢献をしたといえよう。

一方、器械の性能改善によりもたらされた演技内容の高度化、そしてそれを背景に一九九〇年代以降に行われた体操競技の大きな変化を支えていったのが、度重なる採点規則の改定であった。表一にみられるように、常により高度な演技内容を追求する体操競技の進展方向に合わせるように、採点規則における技の難度段階もかつての「C難度」を最高難度としていたものから一九八五年には「D難度」、そして一九九三年には「E難度」というように次々により高い難度段階が設定されていき、二〇〇九年には「G難度」が新設されるまでになっている。このままの進展方向を保ち続けるならば、「H難度」から「I難度」といったように際限なく高難度が設定されるようになっていくことは想像に難くない。生身の人間が行うスポーツという観点から考えた場合に、こうした傾向は果たして正常と言えるであろうか。

また、こうした採点規則に基づいて行われる競技結果の判定方法についても、より機械的・数量的・分業的な合理性を追求する方向で変えられてきている。採点規則に基づくといえ審判員の主観が介入しやしい体操競技の採点においては、昔から採点結果に対して不信感を持たれるケースが少なからず生じていた。グローバルスポーツとして進展していく

上で判定方法における客観性と正確性の向上は必須の条件であり、選手に対してもメディアを通じて観戦する観衆に対してもその判定結果の妥当性を示すことが求められた。そのためにも度重なる採点規則の改定が行われてきたのであり、それは表1にみられるように規則の細分化、審判員の数の増加と分業化（演技実施のみ採点する審判員と演技構成のみ採点する審判員との分業）、実施の採点における身体各部の角度や時間や距離等に基づいた数量的・機械的な判定方法といったように、より客観性を高めるような方向で改定が行われてきている。こうした採点規則の改定は、確かに規則に基づいた判定結果の客観性と正確性を高めてきたと考えられるが、その一方で人間（審判員）の感性による評価も重視しながら人間（選手）の運動をトータルに評価しようとする、体操競技というスポーツが元々持っていた基本的特性が大きく変容することになったともいえよう。

こうした規則改定の流れは、二〇〇六年の改定において、体操競技が一九四九年の統一ルール制定以来保ち続けてきた「一〇点満点」という完璧志向の枠組みを廃止して、一〇点を越える上限なしの最高得点、つまりより高い達成（点数）を追求する方向へと大きく転換するまでに至った⁽¹³⁾。そうした変化をもたらした背景には、高難度の技の開発スピードに「一〇点満点」の採点システムが追いつかない状態が生じ、演技の優劣の差を明確に判定することが困難になり採点をめぐるトラブルも数多く生じてきたことがあげられる。そのことでより客観的で正確な判定方法への要請が強くなり、より多くの高難度の技を実施した場合に一〇点を超える点数

をつけることができるように、判定のシステムおよび競技のシステムが大きく変えられていくことになったのである。ちなみに、こうした変化は同じ採点競技であるフィギュアスケートにおいても同様にみられる。従来「六点満点」の採点システムであったものが、二〇〇四―二〇〇五シーズンから上限なしに技術点と構成点を加算して結果を判定する「ISU（国際スケート連盟）ジャッジングシステム」に変更になり、現在では二〇〇点を越える点数で優勝が争われるようになってきている⁽¹⁴⁾。

体操競技やフィギュアスケートにみられるこうした変化は、常に高い達成（業績）を追求することを是とする近代的な産業文明の論理と合致するものと考えられる。いかに多くの、そしてより難しい技を組み込んで演技構成しているかを、それぞれの技にその難しさに応じた価値点を与え、それを合計した演技構成点に実施における出来映えとミスをチェックして出される演技実施点を加算して出された最終結果の点数で優勝が決められていく。ここでは、パフォーマンスがすべて点数化され、その点数はより高難度の技の開発に依りて上限なしに上昇していく可能性がもたされている。その可能性を実現するために、常にスポーツ科学やテクノロジーの最新の成果が利用されていく。こうした状況は、常に進歩・発展を追い求めていく現在の経済を中心としたグローバル社会のあり様と同様のものと捉えることができる。

4. おわりに

これまで述べてきたように、一九九〇年代以降の経済中心

のグローバル化に沿って多くのグローバルスポーツがその商品価値を高めるように進展してきたが、体操競技もまた同様の進展をしてきている。

体操競技は、人間技とは思えないような非日常的驚異性をもつ難しい技を際限なく追求する方向でその歩みを進めてきている。それは、スポーツ医・科学の研究成果に基づいた徹底した科学的トレーニングと低年齢からの組織的・計画的な育成に基づいて選手の身体をサイボーグ的と言えるほどに鍛え上げて習得した身体的能力と、最新のテクノロジーの成果を利用して製造された器械のより高い性能とが相まって、絶えず限界を超えていく技の開発が実現されてきたのである。そして、そのようにして超人的なレベルまでに高度化した競技の結果を「正しく」判定するために採点規則も幾度となく大きく改定されてきている。

このような経緯を経て到りついた現在の体操競技の姿は、科学技術の成果を結集した高性能の体操器械を用いて作り出された非日常的な競技環境・空間のなかで、サイボーグ的と言われるほどに鍛え上げられた身体能力をもつ選手が繰り広げる超人的な演技を、機械的・分業的な採点システムでより客観的に判定を行う商品価値の高いスペクタクルと化したもの、と捉えることができよう。

こうした体操競技の現在の姿は、経済原理を中心に動く現在のグローバル社会を背景にして生み出されてきたものであり、そこでは「経済」の要請が外圧として働き、競技そのものがイベントとして商品化され、そこでの器械も選手のものもイベントとしての体操競技の商品価値を高めるための

手段とみなされ、性能開発される対象として「商品」化されたものとなつていると言えよう。つまり、人間の「モノ」化という、人間の尊厳に関わる大きな問題性を含んだ状況がそこには内在しているのである。

「進歩発展主義」「効率主義」「成果主義」といった近代的な論理に基づいてグローバル社会が作り上げられてきたが、そうした方向性で発展してきた近代文明社会は、ここにきて多くの側面での限界が言われ出し、遠くない「破局」の到来が警告されるようになってきている¹⁵⁾。グローバルスポーツも、また同様の状況にあると捉えることができる。そうした状況は、近代的なグローバル化の方向での進展が「臨界」に達しようとしているともいえよう。

今回の研究班全体のテーマは、「ポストグローバル社会におけるスポーツ文化」となっている。しかし、本小論で検討してきた体操競技の現状をみる限り、身体能力の開発、高度な性能をもつ器械の準備、いずれをみても現在の体操競技は特定の一部のものだけが関われるスポーツという傾向がより強くなってきており、グローバル化の極みに近づいているものの、そこから新たな別の方向性に向かう兆しはほとんど見えない。そうした状況のなかで、ポストグローバル社会のスポーツ文化というものを考えるためには、現在のグローバルスポーツに内在する諸問題を批評していくことが重要になってくるであろう。その際の観点となるのが、生身の人間の行うスポーツとは何か、という根源的な問いではないかと考えられる。

【注および主要参考文献】

- (1) ジョン・カバナ、ジェリー・マンダー編『ポストグローバル社会の可能性』、緑風出版、二〇〇六年、一六九〜二一六頁
- (2) F.L.Jahn / E.Eiselen : Die deutsche Turnkunst, 1816, Berlin.
- (3) 金子明友『体操競技のコーチング』、大修館書店、一九七四年、一〇〜一四頁
- (4) 日本体操協会『採点規則 男子 一九九七年版』、四頁
- (5) 旧ソ連、旧東ドイツの選手養成の状況については、次の本に詳しく書かれている。
- (6) K T S 体操研究会編『幻のスポーツ王国 東ドイツ体操の秘密』、自由現代社、一九九一年。長谷川公之・山本茂著『衝撃 東独スポーツ王国の秘密』、テレビ朝日、一九九〇年。ミッシェル・イエシス著『ソビエト・スポーツの強さの秘密』、ベースボール・マガジン社、一九九〇年。
- (7) K・H・ベツテ、U・シマンク著『ドーピングの社会学—近代競技スポーツの臨界点』（不昧堂出版、二〇〇一年）の中に、ヨーロッパのドーピング事情が詳細に書かれている。
- (8) 西谷修著『理性の探究』、岩波書店、二〇〇九年、九八頁。
- (9) 滝沢康二『体操競技の何度に関する哲学的検討』、『日本体育大学紀要』Vol.28 No.2 一九九九年、一一〇頁
- (10) 滝沢康二『体操競技界における現状の諸問題についての哲学的検討』、『体育原理研究』第二五号、一九九五年、一七〜一八頁。
- (11) 松本芳明『体操競技、その高度化のゆくえ —技術・ルール・器械の関係史』、『新世紀スポーツ文化論Ⅱ』タイムス、二〇〇二年、一九〜二〇頁。
- (12) 松本芳明、前掲書、二六〜二七頁。
- (13) 松本芳明、前掲書、五頁。
- (14) 日本体操協会『採点規則 男子 二〇〇六年版』、一二頁。
- (15) ISU JUDGING SYSTEM ; Introduction, In: ISU Official Site (<http://www.isu.org/en/single-and-pair-skating-and-ice-dance/isu-judging-system/introduction>)
- (16) ジャン＝ピエール・デュピュイ著『聖なるものの刻印 科学的合理性はなぜ盲目なのか』、以文社、二〇一四年。この本の訳者の一人である西谷修氏が「なぜ本書を訳出するのか 訳者あとがきに代えて」（三三六〜三四三頁）で、デュピュイの見解（破局論）を的確に批評にして現在の文明的な危機状況について解説している。

表一 採点規則の変化の概要

○1949年	国際体操連盟 (FIG) 最初の統一規則の作成 ①1人の主任審判員と4人の審判員 ②難度、構成、実施という3つの採点区分 ③4審判員の中間の2得点を平均して決定点を算出
○1954年	A、B、Cの難度を設定
○1964年	A、B、Cの各難度の具体的な技を体系的に整理 難しい技の実施に対する「減点緩和」規則の制定
○1968年	「加点」の規則を新設
○1975年	「加点」の規則で、決断性・獨創性・熟練性の各々に0.2加点となる 「減点緩和」規則の廃止
○1985年	「D難度」新設
○1993年	「E難度」新設 加点をD・E難度のみに限定し、配点を変更 (0.6→1.0) 審判構成を4審判から6審判 (主審+T A+6審判員=計8名)へ変更 機械的・客観的な実施採点 - 身体各部の角度や距離等の客観的数値により減点
○1997年	「SE (スーパーE) 難度」新設 加点の配点の増加 (1.0→1.4) 「審判分業制」の導入 (主審1名+A審判2名+B審判6名=計9名) A審判 - 演技価値点 (難度+構成+加点=最高5.0) の採点 B審判 - 演技実施点 (5.0満点から減点=最高5.0) の採点 *合計10点満点 「規定演技」の廃止
○2001年	1997年版と基本的枠組みの変更なし。 技の難度がかなり変更 (難度格下げ、新設等) され、加点の配点を変更 (1.4→1.2) → 加点を取ることが難しくなる
○2006年	「10点満点」の枠組みを廃止 決定点=Aスコア (演技価値点)+Bスコア (演技実施点;最高10点) A審判員 (2名) - 難度点+技グループ点 (+ゆか・鉄棒の組合せ加点) B審判員 (6名) - 10点満点から減点 「F難度」の新設 (「SE」難度を廃止) 各難度の価値点変更; A0.1~F0.6まで難度ランクに応じて0.1ずつ増加
○2009年	「G難度」の新設 (難度価値点: A0.1~G0.7) スコアの名称変更; Aスコア→Dスコア、Bスコア→Eスコア
○2013年	基本的には2009年版からの変更はなし。 審判構成の変化: D審判2名+E審判5名+R審判2名=計9名 (*R審判; Eスコアに問題が生じた時に自動的に点数を修正する役割)

※表一は、(10)の拙著論文において用いた資料に加えて、『採点規則』二〇〇六年版、二〇〇九年版、二〇一三年版を利用して編集したものである。

Gedanken zur gegenwärtigen Situation und Problematik des Kunstturnens

MATSUMOTO Yoshiaki

Zu zwei Punkten habe ich mir Gedanken gemacht:

- 1) Wie hat sich das Kunstturnen von den 1970er Jahren bis zur Gegenwart entwickelt.
- 2) Was für einen spezifischen Inhalt und welche Problematik weist das Kunstturnen in unserer Gegenwart auf.

Zu 1)

Seit den 1970er Jahren hat sich das Kunstturnen in Richtung von stets höheren Anforderungen und somit fortschreitendem Schwierigkeitsgrad der Übungen entwickelt. Damit hat das Kunstturnen ein sehr hohes Niveau erreicht, was auf die folgenden drei Faktoren zurückgeführt werden kann:

- a) Basierend auf den Ergebnissen der neuesten Sportwissenschaft, erzielen die Trainingsmethoden des Kunstturnens hervorragende Effekte.
- b) Die Turngeräte werden - aufgrund von gezielter Forschung - ständig verbessert; ihre Leistungsfähigkeiten nehmen laufend zu.
- c) Die Bewertungsprinzipien in Wettbewerben wurden mehrmals überarbeitet, um damit einen höheren Schwierigkeitsgrad von Übungen angemessen honorieren zu können.

Diese drei Faktoren führten dazu, dass die Kunstturner in den letzten Jahren ihre körperlichen Fähigkeiten immer mehr steigerten und stets noch schwierigere Übungen zu kreieren begannen.

Zu 2)

In der heutigen Global-Gesellschaft mit ihrem Fokus auf Geld und Wirtschaft, wird alles (auch Wasser und Luft usw.) als "Ware" behandelt. Kunstturnen ist als Event ebenfalls zu einem hochwertigen "Produkt" geworden, das eine Menge von Zuschauern anzieht. Um den wirtschaftlichen Wert eines Kunstturner-Events zu erhöhen, wird von den Sportlern gefordert, dass sie ihr Leistungsniveau fortwährend steigern. Diese heute extrem gewordene Leistungsfähigkeit des Turners wurde auf rationale Art durch wissenschaftliche Forschung erzielt. Eine solche wissenschaftliche Optimierung sportlicher Leistungsfähigkeit ist aber ähnlich wie die Perfektionierung einer mechanischen Leistung. Mit anderen Worten: der Körper des Turners wird je länger je mehr zur „Maschine“ zu purem „Material“ degradiert. Das scheint mir im aktuellen Kunstturnen zunehmend eine grosse Problematik von Menschenwürde zu werden.